

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	17 / 2005 / 29-32
タイトル	幻のミチノクスミレの発見者
著者名	二唐寿郎

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

幻のミチノクスミレの発見者

— 黒石の牧野富太郎 佐藤^{うざん}雨山 (1893~1955) —

第7代 二唐寿郎



V.mutsuensis W.BEC ミチノクスミレ

すみれの絵がありその下に

タチツボスミレ・オホタチツボスミレ等に類似スルモノデアリガ全体ガ纖弱デ葉ハ菲ク時ニ裏面ハ帯紫色ヲ呈スル。
花ノ側弁ニ毛ガアルノデ類似種トケラレルガ、タカネタチツボスミレトハ花ハ淡色デ且ツ大キク♀ハ眞直デアリ着花数モ多イ。又草丈モ高イ。
花ハ地上茎葉腋カラ出テ托葉ノ縁辺ハ毛状ニ細裂シテキル。
小苞片ハ短イ。閉花ニハ極メテ短小ナ花卉ヲ有スル。
大正四年六月上旬ニ南津軽黒森山ノ風穴帯デ採集シタモノデアル。未ダ他ノ産地ヲ知ラナイ。頗ル稀品。

と記されてある。

なお巻頭から一部抜粋すると、『小生ガ創製シタガラス版印刷(※)デ自画自刷ヲ試ミタ。何シロ印刷技術ガ屈劣ナ上ニ資材難デ思ウヨウナモノガ作レナイ。幸イ篤志家野呂善造氏カラ用紙ノ寄贈ヲ受ケ……』とあるから太平洋戦争開戦後の物がない時にやっとの思いで作った苦勞が偲ばれる。

※ガラス版印刷:採集した植物の上にガラスを載せて形をそのままなぞっていくので、大変良く描くことができたが、永く保存できないので成功しなかった。

今私の手元にうす茶色に変色した謄写版印刷した手書きの一冊の本がある。

表紙には、『津軽のすみれノ図ト詩集』黒石文学会発行とある。裏表紙には、

昭和21年12月25日印刷

昭和22年4月5日発行

著作兼発行兼印刷人

青森県南津軽郡黒石町大字浜町 佐藤耕次郎
発行所 青森県南津軽郡黒石町大字徳兵エ町
黒石文学会

となっている。

この本の38ページをコピーした物が左の絵である。変色しているため書いている字もかすれてはつきりしないが判読すると、上の方から

さらにそれから約 30 年後に発行された(浅瀬石川郷土志 昭和 51 年 4 月 1 日発行黒森山の植物 佐藤雨山・工藤親作著)には、次のように書き直されている。

『ミチノクスミレ *Viola mutsuensis nakai*

堇の一種で私は本県で初めて発見したものである。尤も未だ此処より他に全く産地を聞かない。此の種を私は、先年雑誌園芸の友誌上でクロモリタチツボスミレと仮に命名して置いたが、其後、理学博士中井猛之進氏が植物学誌上で上記の如く発表し、和名も上記の如くされた。ムツエンシスの名称は陸奥の国名から採ったものである。

この堇はよく路傍にあるタチツボスミレに似てゐるが、花部に於いて彼と全く別世界のものである。正に珍中の珍として推奨に値する。著しい特徴は花内に毛がある事と花は必ず地上茎から出る事である。』

しかし残念なことにこのミチノクスミレは、現在の学名が「アイヌタチツボスミレ *Viola sachalinensis Boiss*」となっている。なぜ、ミチノクスミレがアイヌタチツボスミレになったのかは定かではない。

それでは、タチツボスミレとアイヌタチツボスミレとの区別は、雨山は『著しい特徴は、花内に毛がある事と花は必ず地上茎から出る事である』と記しているが、もう少し詳しく牧野新植物図鑑で調べてみるとアイヌタチツボスミレはエゾタチツボスミレの近縁種と述べている。それぞれの差違点をまとめると次表のようになる。

現在ミチノクスミレというスミレは図鑑の上では存在しないので、このままでは幻のスミレとして忘れられてしまうことになる。青森県の植物研究家佐藤雨山(本名耕次郎)が本県で初めて発見したことを忘れてはならない。

なぜ私が此のスミレにこだわったかという、実は佐藤雨山は私の母の兄、私の伯父に当たるからである。今でも私の母は、「もっと上の学校に入っていれば、立派な植物学者になれたらうに。」と嘆く。

雨山の生い立ちをもう少し詳しく述べると、1893(明治 26)年 6 月 1 日、西谷彦太郎、むらの次男に生まれた。祖父が徴兵から免除させるため息子(雨山)の戸籍だけの婿養子縁組で佐藤を名乗らせた。その後親は西谷姓に戻ったが、雨山はそのまま佐藤姓と家業を引き継いだ。実家は近江商人の流れをくむ大きな呉服商、金物商であった。しかし後を継いだ雨山は、家業をほったらかして、毎日体から植物採集の胴乱をはなさず山野を歩き回ったため家業も傾いてしまった。

表1 「ミチノクスミレ」近縁種の比較

	タチツボスミレ	エゾノタチツボスミレ	アイヌタチツボスミレ
産地	北海道～沖縄	本州中部以北	北海道より北に多い。 本州では中部以北にまれに産する
茎	長柄のある根葉とともに 束生、互生	20～30cm 円柱形、直立、数本群が つて出る	5～10cm 普通は倒状するか斜めに 立つ
托葉	広皮針形、へりは櫛の 歯状、に深く分裂	長い楕円形、へりは荒い 櫛の歯状	卵形浅裂かきよ歯状
根葉			退化せず
葉身	卵円形や三角状卵形で 基部は心臟形、へりはきよ 歯	三角状心臟形、先がとが る。へり鈍きよ歯	タチツボスミレとよく似て いる
花	春茎の下部に長い花柄、 その先に左右対称の淡紫 色を横向けに開く	初夏の頃茎上部の葉腋 長い花柄の白色又は紫 色花を側向して開く	常に青紫色
花弁	側弁、唇弁に紫の筋	白色花でも唇弁に紫色の 筋	
距	5～7mm	2～3mm	
花柱	棒状先が幾分前方へ曲 がりそこに柱頭がある	側弁の内側に突起毛 先端から柱頭の背部に かけて突起毛 日本産のスミレでは、この2種しかない	

採集し、標本にした植物は数千種にもものぼる。採集して、牧野植物図鑑で調べてもわからない時は、母から旅費を工面してもらい、著者の牧野富太郎の処へ、二度、三度と訪ねた。晩年腎臓を患い1959(昭和34)年10月1日、柴田高等学校で授業中脳内出血で倒れ67歳で他界した。〈黒石人物伝 黒石教育委員会発行 平成3年3月25日発行〉

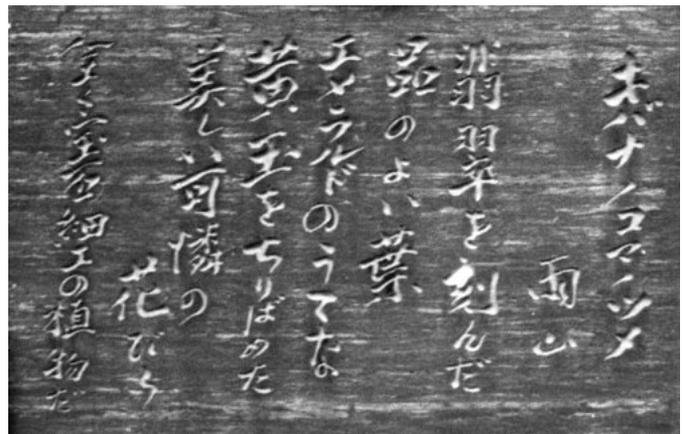
そのほか雨山は、植物だけでなく、郷土史の研究、文学など広く関わっていた。そのため上で紹介した本が黒石文学会発行となっているのである。スミレの図の有る次のページにスミレに関する自作の詩を載せている。45ページにあるキバナノコマノツメには次のような詩が載っている。

1996(昭和41)年、雨山がこよなく愛した黒森山の浄仙寺境内に、黒石文学連絡協議会と黒石郷土史研究会の人たちの手によって文学碑が建立され、それに次頁の詩が刻み込まれている。(黒石人物伝から引用)

自然をこの上なく愛し、平和をこの上なく愛した叔父雨山は、最愛の息子四男の耕作を戦争で亡くし、表紙の裏に、

『太平洋戦争ノ犠牲ニナツタ四男耕作ノタメコノ一書ヲ作クル』と記している。この『スマレノ図ト詩集』は、愛する息子への鎮魂の書なのである。

叔父雨山は、『自分の研究は、郷土愛である。自分は学者でもなく専門家でもない。生来自然界が大好きでややもすれば本業を次にして山川草木を親しみたがる。ところが元来見解が浅く学識足らず、又文が拙くして己が期待を実現できないのを遺憾とするのである。しかし、自然を愛し郷土を愛する点においては強い自信がある。』「勝地浅瀬石川」でこのように述べている。



キバナノコマノツメ
雨山

翡翠ヲ刻ンダ

品ノヨイ条

エメラルドノウテナ

黄玉ヲチリバメタ

美シイ可憐ノ

花ビラ

全ク寶石細工ノ植物ダ

黒石 浄仙寺境内の文学碑碑文

伯父が発見した幻のミチノクスミレと会いたいと思い、黒森山に行って探してみたが、未だに見つけることが出来ないでいる。